



Title	台湾における日本の職人イメージの受容と変容
Author(s)	林, 蔚榕
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55714
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (林 蔚榕)	
論文題名	台湾における日本の職人イメージの受容と変容
論文内容の要旨	
本研究は、台湾における日本の職人イメージの受容プロセスと変容の様相を考察し、それが「台湾職人」というローカル文化の再発見・再評価へと至るメカニズムを解明することを目的とする。分析にあたり、職人マンガの輸入と受容をはじめ、職人イメージの形成に大きな影響を与えた『TVチャンピオン』の放送、さらに新聞記事や日常生活にみられる実例を通して、より多様な側面から台湾における日本の職人イメージの受容と変容の過程を明らかにした。そして最終的に、日本の職人に対するプラスイメージを受けて、台湾の職人及びその伝統技術に対する再発見・再評価が重視されるようになったことを指摘した。 第1章では、メディアコンテンツの中でも最も早く台湾で受容され、台湾における日本の職人イメージの形成の土台となった職人マンガを取り上げた。その翻訳・出版状況を調べた上で、中学生向け週刊紙の『好讀周報』における紹介、『将太の寿司』の新聞記事分析などから、台湾における日本の職人マンガの受容実態を考察した。その考察を通して、職人マンガは娯楽性を持つメディアコンテンツでありながら、「専門的な知識」や「プロフェッショナルの精神（プロ精神）」が描かれており、その閲覧によって豊富な知識と情報が得られると肯定的に捉えられていることが示された。中でも、最初に翻訳された『将太の寿司』は、日本の寿司職人を題材とすることで人気を獲得し、さらに人気俳優が主演するドラマ『将太の寿司』との相乗効果により多くの注目を集めるようになったが、『将太の寿司』をはじめ、多様な職人マンガが台湾で翻訳・出版されることにより、マンガを通じて描かれた様々な分野の職人に関する知識や情報も伝達されるようになる。これはその後の職人イメージを形成する重要な土台となり、そこから「専門性」、「プロ精神」といった職人イメージが形成されていったと考えられる。 第2章では、台湾人の職人に対する認識およびそのイメージ形成に大きな影響を与えてきた日本の競技型バラエティ番組『TVチャンピオン』を事例とし、それと職人イメージの形成との関連性を分析した。『TVチャンピオン』では参戦する職人の個性と魅力を引き出し、そのキャラクター性を表現するマンガ的な演出が見られる一方、普段目にする事のない職人の仕事現場、技の駆使、職人氣質に着目し、専門的な視点から捉えるという側面もある。そこで表象される職人の「専門性」・「こだわり」・「極めの精神」といった特徴が番組を通して台湾の視聴者に強いインパクトを与え、高い評価を得たことが当時の新聞記事分析からも窺える。さらに、番組でチャンピオンを獲得した職人が台湾に招かれ、様々な活動やイベントに参加し活躍することにより、『TVチャンピオン』を通して形成された日本の職人イメージが一層強化され、定着するに至ったのである。 第3章では、台湾の大手新聞社のデータベース「聯合知識庫」を用い、1987年から2014年に至るまでの職人に関連する記事に基づき、「職人」という言葉が職人イメージの形成・定着の過程においてどのように消費されているのか、その受容と変容の様相を調査した。分析結果によると、2002年までは「職人」という語が使用された記事は皆無か僅かだったが、2003年に入ると、新聞記事においてその使用が次第に増加し、どの年次の記事からも使用例が検出された。1990年代半ばから2000年代にかけて、台湾では「日本ブーム」の影響もあって、日本の情報やコンテンツが溢れるようになった。こうした流れに応じ、「職人」がメディアに取り上げられるケースも増加してきた。「職人」という語は日常生活においても使用されるとともに、その言葉の内面にある職人氣質や職人精神も、新聞やその他のメディアを通じて台湾で知られるようになっていったのである。日本の文化が積極的に消費されている環境の中で、「職人」という語は、まず「伝統のある日本」というイメージとして受容されていた。しかし、台湾人対象の記事が書かれるようになると、「職人」が日本の伝統的な文化として受容される一方、その言葉に含まれる「専門性」に着目し、それを台湾のプロフェッショナルに対して用いるという傾向も見られるようになった。台湾人を「職人」として捉え、そこに「専門性」という内面的な特徴を見いだす動向は、本研究の第4章で考察する「台湾職人」の再発見・再評価の端緒となるものである。	

第4章では、「専門性」・「こだわり」・「極めの精神」といった日本の職人のプラスイメージが台湾で受容される一方、台湾文化復興の潮流において台湾の職人とその伝統技術に対する再発見・再評価が行われている動向について実例を通して検討した。日本の職人イメージが受容される一方、台湾ではローカルの職人及びその伝統技術に対する再評価も重視されるようになった。こうした中、「職人」という言葉ないし「職人精神」も様々な場で見られるようになった。近年、政府機関が主催した「台湾職人」をテーマとした文化イベントにおける「職人精神 台湾文創的魂（訳：職人精神 台湾の文化創作の魂）」などがその一例として挙げられる。また、「台湾職人」を題材にした書籍も何冊か出版された。中でも2013年に出版された52名の「台湾職人」を記録した『職人誌』は大きな注目を集めた。それは様々な分野の職人について、たんなる紹介のみにとどまらず、その修業過程・技術・道具・仕事態度に至るまで詳しく語られており、「台湾職人」およびその職人精神を再評価しようとする意図が認められる。

そうした台湾文化の再発見・再評価の流れをふまえ、台湾の職人（師傅）を題材にしたメディア作品も制作されるようになった。第4章で事例として取り上げた映画『總舖師』は、台湾の伝統文化「辦卓」（宴会料理）を題材にした、近年注目される台湾映画の一作である。この映画では「台湾職人」という言葉は用いていないが、そのストーリーには台湾で失われつつある伝統文化を追求するという再評価のメッセージが込められている。しかし注目に値するのは、この映画では台湾文化を表す人情や郷土色が描かれる一方で、日本の職人マンガ的な要素も巧みに用いられ、ハイブリッド的な作品として仕上げられていることである。日本のメディアコンテンツは、ただイメージの形成において消費されるだけではなく、それが媒介として伝達する文化的メッセージないしコンテンツ自体も台湾という異文化の中に受容されながら、文化として浸透し影響を与えるという側面をも有している。台湾で独自に作られた『總舖師』という作品は、まさにそのような性質を反映した文化的産物なのである。

本研究の分析から導き出された結果の一つとして、「職人」という用語の概念の変容が挙げられる。「職人」は台湾において日本の職人に限らず広く捉えられ、多義的に使用されているが、その原点となる日本の職人イメージはいかなるプロセスで台湾に伝達および受容されていくのかという問題に関して、本研究の考察を通して、そこには日本のメディアコンテンツが媒介として大きな役割を果たしていることが示された。

また、本研究の結果から、日本の職人イメージが形成されたプロセスが明らかになった。日本の職人イメージの受容に関しては、公式ルートによって日本発のメディアコンテンツが台湾に大量に輸入され、受容されるようになった1990年代に遡ることができる。日本マンガは、1970年代から1980年代にかけてすでに海賊版として台湾で大量に流通し、その表現形式とストーリー展開が親しまれてきた。そうした状況を背景に、1992年に新しい著作権法が確立することにより、日本マンガは急速に台湾マンガ市場で優位を獲得し、多様な作品が次々と翻訳・出版されるようになった。1993年には早くも『将太の寿司』と『ミスター味っ子』の二作の職人マンガが翻訳されている。そして、日本のテレビ番組をはじめとするその他のコンテンツと連動し、そのイメージがさらに強化されたのである。

日本製コンテンツの著作権保護が可能になると、1994年に『TVチャンピオン』の放送が始まり、台湾における職人イメージの形成に大きな影響を与えた。職人マンガや『TVチャンピオン』のような職人に関する番組を通して、台湾人における日本の職人に対する一貫した「専門性」というイメージが構築されてきた。そして、職人の「プロ精神」を代表する「こだわり」・「極めの精神」というイメージも職人マンガを土台に、さらに『TVチャンピオン』の演出により強化されていったのである。そのような職人イメージが形成されるにつれて、「職人」という用語も頻繁に使用されるようになっていった。

台湾における日本文化の輸入や消費について、これまではドラマにみる近代的な日本、都会の恋愛、オタク文化、東洋の異国情緒、日本料理など、様々な観点からの研究が行われてきた。「職人」もその一環として、用語の定着とともに、その意味する「専門性」や「プロ精神」などのプラスイメージも台湾人の生活に浸透してきている。しかし、本研究で明らかにしたように、「職人」はただ受動的に日本イメージとして受け止められ消費されるだけではなく、その優れた点を通じて自文化を見直し、「台湾職人」の価値を見いだすという能動的な側面も認められる。こうした台湾のローカル文化に結びつく異文化受容の型は、これまでの日本文化の消費や受容にはない新たな方向性を示唆している。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (林 蔚 榕)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	北 村 卓
	副 査	教 授	岩 根 久
	副 査	准教授	津 田 保 夫

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本の職人のイメージがメディアを通して台湾でいかに受容され、また変容してきたのかについて、まずそのメカニズムを明らかにし、次にそれが「台湾職人」というローカル文化の再発見・再評価を生むに至ったプロセスを解明すること試みた意欲的な研究である。

第1章では、職人を扱ったメディアコンテンツの中で最も早く台湾で受容された、職人を主人公とするマンガ（以後「職人マンガ」とする）の網羅的、徹底的な検討を通して、そのストーリー展開の構造を提示した上で、台湾における翻訳・出版状況を幅広く調査し、日本の職人マンガの受容実態を明らかにしている。すなわち台湾において職人マンガは専門的な知識やプロフェッショナルの精神を描いたものとして、教育的、道徳的見地から肯定的に捉えられてきたことが示されている。この職人マンガこそが日本の職人イメージを形成する重要な土台となったという指摘は説得力に富む。

第2章では、日本のテレビ局が制作し、台湾人一般の日本職人に対するイメージ形成に大きな影響を与えた競技型バラエティ番組と職人イメージの形成との関連性を分析している。番組のテーマや構成を詳細に分析するとともに、そこで職人が見せる高い専門性や極めの精神といった特徴が台湾の視聴者に強いインパクトを与えたことを当時の新聞記事等の分析等から実証し、さらに出場した職人が台湾に招かれ、様々な活動やイベントに参加し活躍することにより、日本職人のイメージが一層強化され、定着するに至ったと指摘している。

第3章では、台湾の大手新聞社のデータベース「聯合知識庫」を用いて、「職人」という言葉の出現頻度およびそのコンテキストの分析から職人イメージの形成・定着の過程を明示している。その結果、日本ブームを経た2003年以降使用例が次第に増加していることが明らかになった。そして「職人」という語が日本の伝統的な文化として受容される一方、近年では台湾のプロフェッショナルに対しても用いる傾向があるとの興味深い事実を見出している。

第4章では、日本職人のプラスイメージが台湾で受容されるとともに、台湾文化復興の潮流において台湾の職人とその伝統技術が再発見・再評価されつつある動向について、具体的な例をもとに検討している。政府機関が主催する台湾職人をテーマとした文化イベントや、台湾職人を主題とする書籍、とりわけ台湾の職人（師傅）および台湾の伝統文化「辨卓」（宴会料理）を題材にした映画『總舖師』の分析を通して、日本職人のイメージの受容が、台湾で失われつつある伝統文化の再評価の流れに繋がっていることを明らかにしている。さらにこの映画は、台湾文化を表す人情や郷土色を描きつつ、同時に日本の職人マンガ的な要素も巧みに用いており、ハイブリッド的な作品として独自なものとなっていることを詳らかにしている。

台湾における日本文化の輸入や消費について、これまではテレビドラマにみる近代的な日本像や都会の恋愛、オタク文化、異国情緒、日本料理など、様々な観点から研究が行われてきたが、本研究は、職人イメージという独自の観点から、日本文化の受容と変容の様相を明らかにしたものであり、その独創性は高く評価される。またそのイメージは単なる日本イメージの一つとして消費されるに留まらず、「台湾職人」の価値を見出そうとするローカル文化の再評価にも結びついているという指摘は、台湾における日本文化の受容研究において新たな領野を切り拓くものであるといえる。ただし、メディアの特徴の違いやこうした異文化受容の形態の独自性など、いまだ分析が不足している点もあるが、全体として優れた研究となっており、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。